

巻 頭 言

早稲田大学教授
CAUA 会長

後藤 滋樹

「フラット化する社会」という指摘があります。情報通信技術の発展がインドのサービス業にチャンスを与えて米国人の職場を奪うという構図です。このような変化を防ぐことは出来ませんが、「フラット化」という言葉は誤解を招きやすいと思います。情報通信技術が実現する社会においては、決して万人が平等ではないからです。

現代の情報通信革命は、18世紀から19世紀の産業革命を徹底するものだと見なすことができます。そのキーワードは「分業」です。1976年に出版されたアダム・スミスの『国富論』（諸国民の富）の最初の3章は、分業の発展を解説しています。分業は製造業において有効であるだけでなく、知的な作業にも相当の効果があります。

人間の知的作業を分析するのは複雑ですから、人間社会の活動を反映しているインターネットで例題を探してみましょう。分業の好例はクライアントとサーバの協調です。これをフラット化するのがP2Pですが、純粋なP2Pを実現するのは存外に難しく、super nodeが存在する場合があります。クラウド・コンピューティングも分業の一例です。さらにインターネットの形状を考えてみると到底フラットな構造とは言えません。適度の階層を形成しています。

分業というのは自給自足の対極にあります。我々は他者に依存して生活しています。再びインターネットの例題で考えてみましょう。他者が悪人であったら、どのようなことになるでしょうか。ネットワークのセキュリティに関する課題が次々に発生しています。また他者が倒れてしまうリスクを、どのように見込めば良いでしょうか。クラウド・コンピューティングは頼りになるのか、リスク管理は誰の責任か、このような話題がCAUAの会合でもしばしば取り上げられてきました。

現代人は他者に依存して生活しています。情報通信システムも同様に他者と協調して稼働しています。このように人間社会を分析する視点でインターネットを観測することができるのは、ネットワークが文字通りの社会基盤となっている証しです。